

入 学 式 の 朝

教育センター教育経営部主任指導主事 藤 田 克 彦

今から15年も前のことになる。

邂逅の4月。

5、6年と担任した子どもたちを卒業させて
次なる子どもたちとの出会いの日。

小学校も中学校も入学式の朝である。

その教え子の名を、仮に「太郎」と呼ぼう。

新しい気持ちで、学校への坂道を車で上って
いくと……………、
つい先日小学校を卒業していった太郎が坂を下
りてくる。

真新しい中学校の制服はダブダブで、袖口か
らは両手の半分ほどが覗いている。

これまた新しい制帽の下の顔は、詰襟の窮屈
さに押し上げられているように見えた。

微かに色づいた桜の下の坂道を
私の車はゆっくりと上っていく。
やわらかな陽射しこぼれる坂道を
太郎は足早に下りてくる。

太郎は近視で、私の車が直前に来るまで気が
つかなかっただけらしい。

車の窓を少し開けて、擦れ違いざまに……
「おはよう。」と言った。
太郎は、
「あっ、先生……………」と、何か言った。

車のサイドミラーで太郎の様子を見ると……
……………。

太郎は、小さなサイドミラーの中で、くるり
と振り返り、一瞬「気をつけ」の姿勢をするや
否や、制帽をとって、深々と頭を下げた。

まさに一瞬の出来事であったが、それはまる
で懐かしい映画のラストシーンのように、私の
脳裏に焼きついている。

以来、その映像は、私が自分の教師を振り返
る時に、必ずスローモーションで再生されるよ
うになった。

新しい出会いの日。

拙いけれどせいっぱい育ててきた子どもた
ちがいなことを自覚する朝。

入学式の朝。

昨日までの学級担任の背中に向かって「礼」
をする子ども……………。

その記憶を思い出すたび、わたくしは太郎に
象徴される子どもたちに育てられてきたと思う
ようになった。

